

月夜三叉口舟を泛ぶ

高野蘭亭

三叉中断す大江の秋

明月新懸る万里の流

碧天向つて玉笛を吹かんと欲すれば

浮雲一片扁舟に落つ

【作者】高野 蘭亭(一七〇四〜一七五七年) 江戸時代中期の儒者。名は惟馨(いけい)、字は子式(ししき)、蘭亭または東里と号す。

江戸の人。荻生徂徠(おぎゆうそらい)の門に入り、学識、拔群であったが十七歳のとき失明、徂徠の助言に従つて漢詩を志した。晩年鎌倉円覚寺のそばに庵を作り死所としたが、宝暦七年江戸において没す。年五十四、詩作万首に及ぶ。

【語釈】*三 又：隅田川下流の今の清洲橋附近の俗称 中洲があり今戸川が落ち合い 水流が三つに分かれていたという観月の名

所 *扁舟：小舟 扁はひらたい

【通釈】隅田川の河口に近く、今戸川が落ち込むこのあたりは中洲が川を分かち、秋の気配が濃く、明月が中天にかかつて、その影をうつし大江の水は萬里に遠く流れていく。興に乗じて澄み切った青空に向かつて笛を吹こうとすると、一ひらの雲が私が乗る小舟を迎えるかのようにただよってきた。